

令和元年5月29日現在

機関番号：22604

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K13209

研究課題名(和文)学校トイレの教育社会史 - “衛生意識”形成のヒドゥンカリキュラム -

研究課題名(英文)Social History of the School Toilets

研究代表者

西島 央(Nishijima, Hiroshi)

首都大学東京・人文科学研究科・准教授

研究者番号：00311639

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は「トイレ・手洗い場等の学校施設・設備が我々の“衛生意識”を形成するヒドゥンカリキュラムとして機能しているのではないか」という仮説を検証するために、日本の明治期から昭和50年頃までの学校の施設・設備の制度と実態の調査とアフリカ3ヶ国の現在の学校の施設・設備の現状を調査した。

その結果、日本では早くからトイレの制度上の整備は進んでいたが、実態が伴わず、衛生意識形成に至っていないことが、アフリカで実態が伴わない背景には水道のインフラ整備が十分でないことがうかがえた。以上から、水道インフラの整備を含めた学校の手洗い場の整備とそこを使った教育実践が、今後の衛生意識形成に必要であると考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子どもの貧困が社会問題になっている中で、健康格差への関心はまだ低い。しかし、グローバル化により多様な社会的背景をもつ子どもが学校に通うようになることが予想される状況では、学校での衛生環境の整備とそれを利用した教育実践をすることが求められる。

本研究は、トイレや手洗い場等の施設・設備がなければ、衛生に関わる教育は子どもに習得されない可能性があることを明らかにした。衛生に関わる学校施設・設備の充実、子どもの健康格差を平準化するとともに、将来の個人の健康と活力ある社会を保障することにもつながる。近年の教育諸学は学力向上に関心が高いが、本研究は、学校の施設・設備に関する研究の必要性を指摘できた。

研究成果の概要(英文)：This study hypothesized, "it might function as hidden curriculum where school facilities like the toilets formed our hygiene awareness". To inspect this hypothesis, I investigated the system and the actual situation of the school facilities from Japanese Meiji period to about 1975, and the present conditions of the school facilities in 3 countries of Africa. The institutional maintenance of the restroom advanced early in Japan, but the actual situation was not accompanied. Therefore it was indicated that it did not lead to the hygiene awareness formation. The reason why the maintenance of school facilities does not advance in Africa is that infrastructure maintenance of the water service is not enough. Thus, it is necessary for the future hygiene awareness formation that the maintenance of the school facilities including the water service infrastructure, and educational practice using them.

研究分野：教育社会学

キーワード：学校トイレ 手洗い場 水道 ヒドゥンカリキュラム 教育開発 健康格差 公衆衛生 社会疫学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、次の3つのきっかけから問題関心を立ち上げた。

第一に、筆者が参加している歴史研究の一環で、飯田市立追手町小学校の学校保存史料の整理作業を行っていた際、昭和4年に鉄筋コンクリート製の校舎が竣工した後から終戦までの看護日誌や学校日誌に「新校舎の水洗便所で大便をしてはいけないと指導しているのに、今日も何人がした」という記述など、生徒の不適切な便所の使い方に関する記述が頻出しているのを発見したことである。

第二に、筆者が2014年の夏に母校の生徒をガーナに引率する手伝いをした際に、ザンビアの医療援助に従事している大学の後輩に近年のアフリカのようすを尋ねたところ、「一定の学歴のある大人に衛生・健康の知識を教えてもなかなか身につかず、その理由がわからない」という状況を紹介してくれた。そのときに追手町小学校の記述を思い出して、日本人も昔は今のような“衛生意識”ではなかったが、直接的科学的な教育ではなく、トイレをはじめ、手洗い場や保健室などの整備によって、用便の後に手を洗ったり体調が悪かったらすぐ保健室に行ったりするようなふるまいを積み重ねるようになり、長い時間をかけて今の“衛生意識”を形成してきたのではないかという仮説が浮かんだ。

第三に、日本人は高い“衛生意識”をもっていて問題がないわけでもない。阿部彩(2013)によれば、疾病の割合や病気からの回復程度等について社会経済階層間で「健康格差」がある。教育格差が社会問題となるなかでさまざまな社会的格差の縮減に取り組んでいるように、学校教育が健康格差を縮減できるように取り組むために何が求められるかという疑問が浮かんだ。

2. 研究の目的

以上の3つのきっかけから、“衛生意識”が社会意識の一側面であるならば、教育社会学の社会意識形成に関する研究成果を活かして、学校教育を通して「健康格差」の解消や“衛生意識”形成に資する知見を提出できないかと考えた。そこで立案した仮説が「トイレ・手洗い場・保健室などの学校施設・設備が我々の“衛生意識”を形成するヒドゥンカリキュラムとして機能しているのではないか」である。この仮説が検証されれば、トイレ・手洗い場・保健室などの学校施設・設備の充実を促し、「健康格差」の解消、“衛生意識”形成のための教育開発援助に貢献することが期待できるであろう。

3. 研究の方法

そこで本研究では、この仮説を検証するために、第一に、日本の明治期から昭和50年頃までの「学校保健及び学校建築の法制度」、「トイレ・手洗い場・保健室などの学校施設・設備の整備」、「教師の生徒に対する衛生・健康面でのまなざしや指導」の三者それぞれの歴史的経緯を整理し、相互の関係を明らかにすることをめざした。

第二に、アフリカの3か国における「学校保健及び学校建築の法制度」、「トイレ・手洗い場・保健室などの学校施設・設備の整備」、「教師の生徒に対する衛生・健康面でのまなざしや指導」の三者の現状を確認し、相互の関係を明らかにすることをめざした。

4. 研究成果

(1) 日本調査の概要

日本では、次の4つの調査を行った。

第一に、学校保健及び学校建築に関わる法制度について、専門書による確認作業。(法制度調査) 第二に、学校関係史料を広く蒐集している京都市学校歴史博物館において、学芸員の和

崎光太郎氏に対するトイレ・手洗い場・保健室などの学校施設・設備の整備に関する史料の整備状況や歴史研究の有無の聞き取り調査と、関連史料の閲覧。(学校史調査) 第三に、日本のトイレ設備の整備と発展の歴史について、専門書並びに博物館の史料の確認。(トイレ史調査) 第四に、これまで長野県において、『長野県教育史』や学校史等の記録からの、上記の三者に関わる文書史料等の蒐集。とくに、学校史に掲載されている平面図や校舎の建て替えに関わる記述に注目した。また、開智学校では、看護日誌や学校日誌が活字出版されているので、そのなかの記述にも注目した。(長野調査)

その結果、当初の予想よりもずっと早く、明治注記頃より三者は相互に関係し合いながら、日本の学校教育における衛生的な環境の整備、衛生や健康に関わる指導が行われていたことがわかった。ただ、これらの法制度の確立や実際の取り組みが、子どもの衛生や健康に対する直接的なまなざしや指導だったのかどうかは、より詳しい検討が必要だ。学校日誌や看護日誌の記述を読むと、明治期から昭和初期にかけて、生徒たちのトイレの使い方にはずっと課題があったようだ。“衛生意識”が高く、衛生状態のよい現代を生きる私たちにはなかなか理解できないところでもあるが、昭和初期頃までの日本人には、もしかすると私たちと近い“衛生意識”はまだ形成されていなかったのかもしれない。

(2) アフリカ調査

日本調査の成果をもとに、アフリカの3ヶ国における「学校保健及び学校建築の法制度」、「トイレ・手洗い場・保健室などの学校施設・設備の整備」、「教師の生徒に対する衛生・健康面でのまなざしや指導」の三者の現状を確認し、相互の関係を明らかにすることを目的に、フィールドワークに取り組んだ。

ザンビア調査

調査開始時点では、いったい何を見学し、データとして調べればよいのか見当もついていたため、首都のルサカのトイレがあってタイプの違う学校を見学したいという希望を前述の大学の後輩に伝えて、希望に添う学校をご紹介いただける協力者の方々を仲介していただくことになった。その結果、次のような特徴のある6校の学校を見学した。

- ・穴式トイレ。建物の近くに手洗い場がない。
- ・簡易水洗トイレながら水が流れない。建物の外に蛇口1つの手洗い場。
- ・水洗式の洋式トイレで水が流れる。建物の入り口に複数蛇口の手洗い場。
- ・学校にはトイレがなく、コミュニティの共用トイレを使用。
- ・私立学校。水洗式の洋式トイレで水が流れる。建物内に複数蛇口の手洗い場。
- ・私立学校。穴式トイレ。教室の入り口にポリタンクが置いてある。

ガーナ調査

ザンビア調査をふまえて、「教員数と生徒数」「校舎の形状や配置」「トイレと水道の設置場所と数(教師用と生徒用)」「トイレのタイプ」「水道のタイプ」「設備の状況」を主な調査項目として、次のような特徴のある4校を見学した。

- ・都市部の私立学校。校舎内に水洗式の洋式トイレ。トイレ内に複数蛇口の手洗い場。
- ・山間部。コミュニティの共用穴式トイレを使用。学校には水道が来ていて蛇口あり。
- ・山間部。穴式トイレ。学校には水場がない。
- ・丘陵地。穴式トイレ。井戸水を汲んでポリタンクに移して使用。

エチオピア調査

以上の調査により、「トイレ・手洗い場・保健室などの学校施設・設備の整備」については、パターンの類型がだいぶつかめてきた。「教師の生徒に対する衛生・健康面でのまなざしや指導」については、教育内容や実際の指導の様子の情報を多少なりとも得ることができた。両者の関係については、学校教育で得る知識と学校環境で経験する実践のズレがあることがわかってきた。次に、水道設備等の学校環境が地域の社会インフラ状況に左右されることをふまえて、学校調査を行う必要がある。そこで笹川アフリカ財団の協力を得て、首都のアディスアベバと周辺州で、トイレや手洗い場等の施設の整っている学校と整っていない学校を6校見学した。

- ・周辺州。穴式トイレ。井戸は使えず、家から水道の水を持ってきて使用。
- ・周辺州。穴式トイレ。隣接のコミュニティ共有の給水タンクより水道を使用。
- ・周辺州の私立学校。水洗式の洋式トイレ。複数蛇口の手洗い場を複数設置。
- ・首都。簡易水洗トイレだが水は来ていない。複数蛇口の手洗い場を複数設置。
- ・首都。水洗式の洋式トイレ。複数蛇口の手洗い場を複数設置。
- ・首都の私立学校。校舎内に水洗式の洋式トイレ。トイレ内に複数蛇口の手洗い場。

滞在最終日に、車で郊外地域を回った。見学先の先生方からうかがった町の水道のあり方が気になっていたからだ。そこで見かけたのは、道路沿いにある公共水道に水を汲みに来る人びとの姿であった。ガイドによれば、公共水道まで大きなポリタンクを持ってきて水を汲み、また家まで持って帰るのだという。リヤカーやロバを使う場合もあるが、人力の場合もある。郊外地域ではこの風景が当たり前になっている。学校教育での実践によって“衛生意識”を形成することで、このような環境を改善できるとも考えられるが、そもそも学校に水道を引いていくことができなければ、実践に取り組めない。しかし、水道を引こうにも、社会インフラの状況は、学校に優先的に水道を引く施策に取り組み以前の段階にあるというのが実状だろう。どこかの歯車を最初に動かさねば、全体は動かないが、どこの歯車を動かせばよいのかが見定められない社会状況にあることがうかがえた。

(3) 研究のまとめ

以上の調査研究を通して、冒頭で示した仮説の検証までは至らなかったものの、三者の歴史的経緯や現状と相互の関係を検討・考察するための指標を見つけることができたと考えている。具体的には、トイレ・手洗い場・水道については表1のような変数と指標を、教育実践という観点では表2のような変数と指標を確認することが必要だろう。

調査対象校の状況をふまえると、これらの変数に、社会インフラや産業、地形・気候の状況なども合わせて、次の変数モデルを想定することができる。「“衛生意識”・ふるまい」は「衛生・健康教育の有無」だけに規定されず、トイレ・手洗い場・水道などの施設・設備状況と学校外の状況の影響を受けており、その総体として社会の「公衆衛生状況」が決まっていく。そしてそのループのなかでさまざまな変数の変化に伴って「“衛生意識”・ふるまい」と「公衆衛生状況」は変わっていくと考えられる。今後はこの変数モデルをもとに仮説の検証に取り組み、かつモデルの精緻化に努めていきたい。

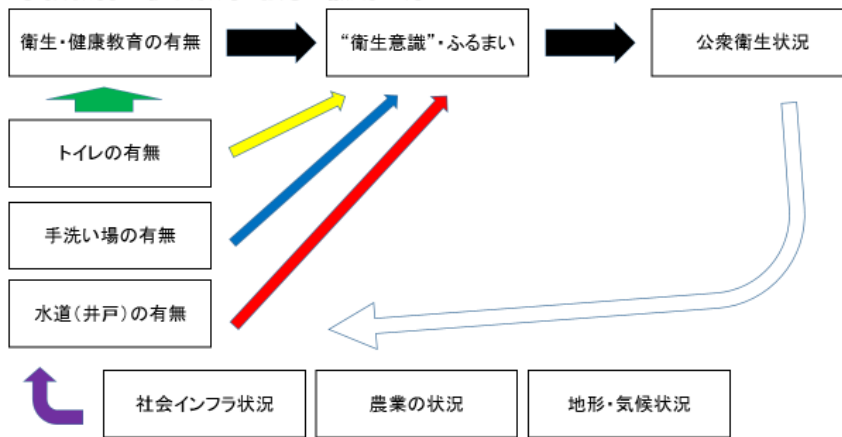
表1 トイレ・手洗い場・水道の状況確認のための変数と指標

便所	有り						無し		
	水洗		簡易水洗		穴式		近隣に有り		近隣に無し
	使用可	使用不可	使用可	使用不可			水洗	穴式	
	場所と数		場所と数				距離と数		
手洗い場	有り						無し		
	水道		井戸		バケツ、タップ式など		近隣に有り		近隣に無し
	使用可	使用不可	使用可	使用不可	使用可	使用不可	水道	井戸	
	場所と数		場所と数		場所と数		距離と数		
水道	有り						無し		
	上水道			井戸			近隣に有り		近隣に無し
	使用可	使用不可		使用可	使用不可		水道	井戸	
	場所と数		場所と数		場所と数		距離と数		

表2 教育実践の変数と指標

施設	保健室有り	保健室無し
教員	養護教諭有り	養護教諭無し
職員	看護師有り	看護師無し
教科	保健有り	保健無し
教育内容	保健衛生有り	保健衛生無し
	水と病気有り	水と病気無し
	人体有り	人体無し
飲食環境	給食有り	給食無し
その他	水を使う教育	水を使う教育
	活動有り	活動無し
	時間長	時間短

学校教育の社会疫学研究の仮説の芽



本研究に取り組む過程で、トイレをはじめとする公衆衛生の問題を扱っている研究領域があること、衛生や健康の問題に生物・心理・社会モデルからアプローチする社会疫学という研究領域があることを知った。その一方で、それらの研究領域の知見や取り組みが、教育諸学や学校教育活動の実践にまで及んでいないことがうかがえてきた。それらを多少は参考にしつつ、学校トイレを中心に衛生や健康の問題に取り組む学校教育活動に関する研究としては、「挑戦的萌芽」という助成枠のなかで一定の成果を上げることができたのではないだろうか。

今後は、まず、日本の小中学校で、あれほどたくさんの手洗い場を、いつから誰がなぜどのような意図から設置しようと考え、実際に設置されるようになり、それが各地の小学校や中学校でなぜ受け入れられていったのか、そのことが「教師の生徒に対する衛生・健康面でのまなざしや指導」とはどのように関わっており、たくさんの手洗い場と蛇口があることやそれを用いた指導が「衛生意識」形成のヒドゥンカリキュラムとしてどのように機能したのかを明らか

にする研究に取り組みたいと考えている。

そのうえで、再びアフリカの学校の衛生・健康に関わる施設・設備と教育内容と実践の状況に関する調査研究と、できれば学校の衛生に関わる施設・設備の改善に実際に取り組みたいと考えている。

また、日本国内に目を向けたとき、第一に、健康格差の問題は、まだ教育諸学の領域ではあまり注目されていないが、公衆衛生や社会疫学、社会福祉の領域では、すでにさまざまな取り組みがなされており、いずれ学校教育現場での取り組みが求められるようになるだろう。そのときに、教育内容と実践だけでなく、学校の施設・設備の整備によっても格差縮減の役割を果たしうるといふ知見を提出できるようにしていきたい。

第二に、2010年代になってから、在留外国人は25%増の約250万人になり、訪日外国人は約4倍増の約3000万人になった。グローバル社会の時代に多文化化は望ましいことであるが、その一方で受入体制の整備も急務である。受入体制として、言語や法律・行政の整備に社会的関心が向けられているが、衛生環境の整備は、それが健康と場合によっては生命の危機に直結するだけに、早急に取り組む必要があるだろう。しかし、衛生環境と衛生的なふるまいもまた文化なので、日本のそれを理解してもらうためには、それぞれの社会・国の衛生環境と衛生的なふるまいについて我々日本人もまた理解を進める必要がある。その際に、学校教育現場に期待されることが大きいと考えられるが、どのようなことに注目して理解し合い、実際に取り組みばよいかを検討するために資する知見を提出できるようにしていきたい。

5．主な発表論文等

〔その他〕

研究報告書冊子

『学校トイレの教育社会史 “衛生意識” 形成のヒドゥンカリキュラム アフリカ3ヶ国のフィールドワーク報告書』(54頁) 2019年3月。

6．研究組織

個人研究であったので対象外。

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。